



Title	<追悼エッセイ>ヴォルフガング・クールマンの訃報に寄せて
Author(s)	嘉目, 道人
Citation	メタフシカ. 2025, 56, p. 29-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103870
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《追悼エッセイ》

ヴォルフガング・クールマンの訃報に寄せて

嘉目道人

はじめに

8月22日の朝、舟場保之教授より、ヴォルフガング・クールマン（1939-2025）が死去したとのお知らせをいただいた。クールマンは、超越論的語用論の提唱者カール・オットー・アーベル（1922-2017）のもっとも忠実な後継者であり、アーベルが2000年代前半に著述活動を引退して以降は同理論の第一人者として、議論の改良と応用に心血を注いだ人物であった。

現在、超越論的語用論は世界的に見てもあまり注目されているとは言えないが、1970年代から90年代にかけては、ドイツを中心に大きな影響力を有しており、日本にも熱心に紹介されていた。そうした時代を（直接にでも、筆者のように間接的にでも）知る人々にとって、2017年にアーベルが、2023年にはその宿敵とも言えるハンス・アルバートが亡くなり、そして今またクールマンがこの世を去ったという事実は、一時代の終焉を否応なく実感させるものであろう。

筆者は、卒業論文でアーベルを扱った後、大学院博士後期課程の学生であった2011年、アーヘン工科大学のクールマンのもとに留学する機会を得た。当時すでに名誉教授で、学生指導からは退いていたクールマンだったが、大変親切に接していただき、今でも感謝している。にもかかわらず、帰国後は無精にして筆者からはあまり連絡もしないまま、この日を迎えてしまった。以下では、超越論的語用論に対するクールマンの貢献の一端を取り上げ、それに対する筆者の印象や、クールマンとの私的なエピソードを記すことで、追悼に代えさせていただきたい。

クールマンの足跡と思想について

ヴォルフガング・クールマンは、バルト海に面したドイツ北部の港湾都市キールで1939年に生まれた。キール大学でアーベルの薫陶を受け、学位を取得したクールマンは、アーベルに従ってヴォルフガング・ゲーテ大学フランクフルトの助手となり、教授資格論文『反省的な究極の根拠づけ』（Kuhlmann 1985）を刊行した。その後、1993年からアーヘン工科大学の教授を務め、同大学で名誉教授となった。2010年には来日し、本学で *handai metaphysica* 特別講演「超越論的

語用論の擁護——超越論的語用論とは何か——」を行っている。

クルマンの主著は、今挙げた教授資格論文ということになるだろう。トーマス・グルントマンは、クルマンへの追悼文の中で、この著作を「おそらく、超越論的語用論について読める中で最良の書」(Grundmann 2025)と評している。筆者としても、哲学的な深みという点ではアーベルの著作に譲るものの、論点の明確さや論証の精緻さにおいて同書は傑出していると考えており、今でも超越論的語用論を論じる際には必ず参照している。その内容は、超越論的語用論の二大テーマである「究極の根拠づけ」と「理想的コミュニケーション共同体」のそれぞれについて、アーベルの主張を補強する議論を展開するというもので、まさにクルマンの面目躍如と言える。

超越論的語用論の言う究極の根拠づけとは、次のようなものである¹。コミュニケーションを可能にする条件の成立を否定することは決してできない。なぜなら、そうした否定的内容を主張する者は、その主張の発話によってコミュニケーションに参加している以上、行為遂行的な次元で、コミュニケーションを可能にする条件の成立をすでに肯定しているからである。これはある種の自己矛盾であり、「遂行的矛盾」と呼ばれる (vgl. Apel [1976] 1998, 69 [237] ; Kuhlmann 1985, 88f.; 嘉目 2017, 36f, 50ff.)。

しかし、そうした発話が必ず遂行的矛盾に陥ると言えるのは、発話の行為遂行とその条件とがあらかじめ知られている場合だけである。そして、われわれが発話する際に、それらを細部まで明示的に知っているとは限らない。この事実は究極の根拠づけにとってのアキレス腱である。多くの点でアーベルと立場を共有する盟友ユルゲン・ハーバーマスでさえ、この点を問題視し、発話のノウハウをノウザットとして明示化する記述が可謬的である以上、究極の根拠づけは不可能であり、また実際には必要でもないと主張している (vgl. Habermas 1983, 196f [154f])。

クルマンの重要な功績の一つは、この発話についての知を「行為知」として定式化したことである。彼は行為知を次のように特徴づけている。

ある x が一つの言語行為 H と見なされるのは、発話者が少なくとも陰伏的に (事後的に有意味に再構成されうるような仕方)でそれをこの行為 H として理解している場合に限られる。さもなければ x は、行為者がその x をしようと決心し、その x について責任があり、その x の遂行に失敗する [...] ことがあり得る、といったものではないことになる。(Kuhlmann 1985, 77; vgl. 嘉目 2017, 61)

それゆえ、発話者は自らの発話がいかなる言語行為の遂行であるのかについて自覚的でなければならぬ。この自覚は、第三者による観察に特徴的な「理論的態度」とは区別される「厳密な反省」(Kuhlmann 1985, 80)にもとづくのだとクルマンは主張する。コミュニケーションを可能にする条件を否定する発話は、自身がコミュニケーションに参加しているという反省を欠いたまま、理論的態度に立って言えば他人事のようになされるものであり、一種の「自己忘却」(ebd.)

¹ 以下の要約は、主に嘉目 (2017) に基づいている。

なのである。

だが、この二つの態度を区別するだけでは、行為知をノウザットとして言語化するプロセスは可謬的だ、というハーバーマスの批判をかわせないように思われる。そこでクールマンは、行為知には批判や修正の対象となりうる周辺部分と、そのような批判や修正のためにもすでに用いられていなくてはならない核心部分とがあり、核心部分の再構成は可謬的ではありえない、と反論する (Kuhlmann 1985, 127ff.; 嘉目 2017, 64)。しかし、これもまた基準の曖昧さといった問題を呼び込まざるを得ない回答であり、反論として成功しているとは言い難いだろう。

クールマンはアーヘン工科大学に移ってからも、この問題を熱心に追究し続けた。2009年の『背後遡行不可能性』(Kuhlmann 2009)では、新たに、通常の学問的討議である「長い討議」と、「長い討議」を中断して議事進行などについて話し合う「短い討議」の区別を導入した (vgl. 54f)。陰伏的な行為知はたしかに即座に無謬的に明示化されることはないが、しかし「短い討議」でのやり取りを通じて徐々に明示化されうる、という主張を展開し、対話篇のように具体的なやり取りまで例示している。しかし、筆者の見解では、これもまたうまくいっているとは言い難い (vgl. 嘉目 2017, 65ff.)。それでも、現時点での最後の論文集である 2023 年の『われわれの理性の構造について』(Kuhlmann 2023)に至るまで、クールマンは超越論的語用論の擁護を決して断念することがなかった。

以上のような経緯から、筆者はクールマンに、自身の哲学的野心を追求するのではなく、ただひたすらに、アーベルが提唱した理論の完成を目指し続ける禁欲的な研究者像を見出していた。しかし、それは一面的な見方であるかもしれない。グルントマンは、晩年のクールマンが、他者の発話を理解することはいかにして可能かという問題を重要視していたことを指摘し、2020年の『他者の思考を把握すること』(Kuhlmann 2020)を、クールマンの「第二の主著」(Grundmann 2025)と呼んでいる。クールマンはそこで、ガダマーの解釈学との接点を探っているという²。筆者は同書について、グルントマンほどの感銘を受けてはいなかった。むしろ、同書が出版された当時は、超越論的語用論の新たな擁護への期待が肩透かしに遭い、困惑したものである。しかし、あるいはこれこそが、アーベルの後継者としてではなく一人の哲学者として、クールマンが最終的に到達した問題意識であったのかもしれない。すなわち、クールマン哲学と呼ぶべきものが同書には現れているのかもしれない。

不勉強な筆者にとってはなお手つかずの領域であるが、もともと超越論的語用論にとって解釈学との対峙は中心的なテーマの一つであった。アーベルの指導教員エーリッヒ・ロータッカー (1888-1965)は、ディルタイの流れを汲む哲学者であったし、アーベルの博士論文 (未公刊)はハイデガーに関するものである。究極的根拠づけをめぐるアルパートらとの激しい論争がアーベルの代名詞になったことで、いささか後景化してしまった感は否めないが、アーベルは初期から一貫して解釈学を扱った論文を発表し続けていた。二巻本の主著『哲学の変換』(Apel 1973)にしても、実に半分近くの論考が、何らかの形で解釈学に言及するものなのである。日本における

² 筆者自身は同書をまだ読んでいない。

アーベル研究史を振り返っても、1970年代には解釈学との関連で論じるものが少なくなかった。

ではクルマンはどうかと言えば、彼もまた、すでに1992年の『言語哲学・解釈学・倫理学』（Kuhlmann 1992）で、解釈学を主題の一つとしていた。それから実に四半世紀を経て発表された『他者の思考を把握すること』は、アーベルの議論に間近で接してきたクルマンによる、解釈学についての思想の集大成と呼べる著作であるだろう。そのような事情を鑑みれば、『他者の思考を把握すること』に、筆者が考えていたよりもはるかに大きな重要性が存する可能性はある。

筆者自身、アーベルやクルマンを研究する中で、ある問題意識を抱いてはいた。それは以下のようなものだ。超越論的語用論がその名称に掲げる「語用論」とは、主にオースティンらの言語行為論およびそこから発展を意味している³。オースティンやサルが問題にしていたのは話し手による言語行為であり、アーベルやハーバーマスの討議理論における中心的な概念の一つである「妥当要求」も、そうした発想を受け継いだものである。だがその一方で、発話は話し手一人で完結するものではなく、常に聞き手が存在するはずのものである。さらに、超越論的語用論が主題とするコミュニケーション共同体は、記号解釈者の共同体という側面も持つ。つまり、超越論的語用論にとっては、聞き手による理解もまた、話し手による発話と同程度に重要であるはずなのだ。「遂行的矛盾」のように、話し手の行為遂行が眼目となる問題に目を奪われすぎると、彼らの思想を矮小化することになってしまうのではないか。

アーベルやクルマンがこうした問題をどう捉えていたのか、筆者は正確に把握していない。とはいえ、真剣に捉えていなかったはずはない。聞き手による理解という問題は、語用論の内部においてはグライスや関連性理論によって追究されているが、ドイツ哲学の伝統においては、解釈学がまさにそれを出発点として発展してきたのである。それゆえ、アーベルやクルマンが解釈学に着目してきたという事実は、彼らが、上に類する問題を意識していたことを示唆しているのである。

筆者にとって解釈学が手つかずの領域だ、というのは単なる言い訳であり、要は、これまで敬遠してきたにすぎない。それは第一には、究極的根拠づけと理想的コミュニケーション共同体の二大テーマこそが論争の最前線であり、自分にも貢献できる余地がそこにあるのではないかと考えてきたからだが、第二の理由として、解釈学がそれ自体で一つの巨大な哲学の分野であり、気安く踏み込むわけにはいかなかった、ということもある。それでも、アーベルやクルマンの哲学を正しく評価するためには、この側面を捨象するわけにはいかない。それゆえ、今後は少しずつでも研究していきたいと考えている。

個人的な追想

以下では、クルマンにまつわる個人的な追想を述べさせていただきたい。筆者が初めてクルマンという名を知ったのは学部生の頃、舟場教授（当時助教授）と入江幸男名誉教授（当時教授）のやり取りからだったと思う。内容は、言うまでもなく究極的根拠づけであった。当時の筆

³ 正確には、パースの記号論やウィトゲンシュタインの言語ゲーム論も念頭に置かれているが、ここでは割愛する。

者は語学力に乏しく、卒業論文はアーペルの日本語訳のみを参照して執筆したのだが、クールマンの著作には日本語訳がほとんどないため、その思想内容を知ることはできなかった。その後、大学院生となり、最低限のドイツ語読解力は身に付いたものの、今度はクールマンの教授資格論文が図書館や研究室に見当たらず（貸し出し中だったのかも知れない）、最終的には自費で購入して洋書の高さを思い知るようになった。

クールマンが来日して本学で講演を行ったとき、筆者は博士後期課程の1年生であった。行為知について質問をしたところ、「ダミアーナを読むといい」と言われたのだが、それが誰なのか分からず困惑したのを覚えている。クールマンが言及していたのは、超越論的語用論者の一人、アルベルト・マリオ・ダミアーナの『行為知』（Damiani 2009）という著作である。実際に入手して読んでみたところ、行為知をカントの統覚になぞらえて理解するという独特な考察が展開されており、大いに刺激を受けた。

同じ年に筆者は、クールマンの在籍するアーヘン工科大学へ留学するための学内審査に臨んだが、ドイツ語会話がまるでできず、3か月後に再挑戦という形になってしまった。その間、留学生とのタンデム（ランゲージ・エクスチェンジ）に勤しんだ結果、会話力がやや改善したことで、どうにか2011年3月から9月までの留学が決まった。パスポートの取得、寮の手配、滞在許可の申請に必要な健康保険への加入など、初めてのことが多く苦労したが、今となっては良い思い出である。

アーヘンには3月2日に到着した。しかしそれから10日もしないうちに東日本大震災が発生し、クールマンをはじめ、現地でのタンデムパートナーやチューターからも「家族や友人は大丈夫か」と声をかけてもらった。幸いなことに、西日本出身である筆者の周囲には大きな被害はなかったが、大変ありがたかった。

クールマンは一貫して非常に親切に接してくれ、すでに学期が始まる前から、定期的に面談の機会を設けて質疑応答を行ってくれた。ただ、筆者としては内容を理解した上であえて前提を問い直しているつもりでも、まったく理解していないと思われたのか、「その話なら私の本（『反省的な究極的根拠づけ』）のこの箇所に書いてある。もう一度読み返してみたまえ」などとあしらわれてしまうことが多かった。ドイツ語力が足りずにそれ以上食い下がることができず、悔しい思いをしたものである。また、筆者には話の内容について考えているときに上や遠くに目をやる癖があるのだが、「私の話は退屈かね」と言われてしまったことがある。本気なのか冗談なのか分からず戸惑ったものだが、これも、ドイツ語力のなさゆえにニュアンスをくみ取れなかったように思う。クールマンは話好きな人物で、普段は機嫌よく雑談や哲学談義に興じているが、話題が超越論的語用論に及ぶと途端にスイッチが入り、熱弁が止まらなくなるところがあった。

3月中に、自身も発表⁴する研究会がミュールハイムで開催されるから来ないか、と誘ってもらい、クールマンが運転する車に同乗することになった。クールマンはベルギーから自動車で通

⁴ クールマンの発表題目は「超越論哲学の擁護」というもので、おそらくは本学で行った講演会とおおむね同内容だったものと思われる。なお、この発表に加筆修正したものが『われわれの理性の構造について』にも収録されている。

勤しているそうで、「ベルギーの方が物価が安いんだ」と言っていた。アーヘンはオランダとベルギーの双方に接しており、国境線ならぬ「三国の角」が観光名所になっている。シェンゲン協定のため、道路上に線が引かれているくらいのもので行き来は自由であり、筆者もドイツのスーパーが休む日曜日には、オランダの隣町まで路線バスで買い物に出かけたものである。クールマンはまた、ハンブルク近郊で不動産投資をしているような話も聞かせてくれた上で、「哲学者にも金儲けができることをすでにタレースが示している」と笑っていた。肝心の研究会だが、今となってはどのような主旨のものであったか定かでないものの、分析哲学に精通した若手が多い会であったように記憶している。そこでクールマンが披露した超越論的語用論の概要は、彼らには新鮮だったようで、批判というよりもむしろ興味津々に詳細を聞く質問が多かった。超越論的語用論は常に批判的であり、それにどう反論するかを考えるものだ、と思っていた筆者には、むしろこの反応そのものが新鮮であった。

前述の通り、クールマンはすでに教育の一線からは退いており、指導学生はいなかったが、名誉教授は望む限り授業を開講できるらしく、一コマだけ授業を持っていた。それは、自身の著作を（もちろん究極的根拠づけを中心に）読み上げて解説するという内容で、近所に住んでいるらしき年配の受講生が多かったのが日本とは違って面白かった。とは言え内容的には退屈だったと言わざるを得ず、もともと一人しかいなかった若い学生はすぐに姿をくらまし、やがて筆者も耐えられずにフェードアウトしてしまった。その後の面談は実に気まずかった。

一度、琉球大学の久高将晃教授がクールマンを訪ねてきたことがあった。久高氏はかつてアーヘンに留学し、そこで初めてクールマンがいることを知って師事するようになったそうである。筆者はすでに博士前期課程のころから久高氏にはお世話になっていたが、当時の思い出話などを聞きながら、三人でアーヘンの旧市街を散歩するのは何とも新鮮な体験で、また楽しい時間でもあった。

夏には、クールマンが音頭を取って毎年開催しているという、クロアチアのドゥブロヴニク近郊でのリゾートを兼ねた研究合宿に同行させてもらえることになった。それは、ペーター・ローズやグンナー・シーベック、アウドウン・エフスティ、ゲルハルト・ゼール、ハンスゲオルグ・ホッペ、ヨン・ヘレスネスといった同世代の哲学者たちによる合宿で、毎日一人か二人の発表があり、残りの時間は海水浴や観光などをして過ごすというものだった。一つ下の世代の代表的なアーペル学徒であるマティアス・ケットナー、そしてアーペルの娘ドロテアも顔を出す、要は仲間内の親密な会合だった。学生は筆者だけで、場違いも良いところだが、その頃にはドイツ語も多少は話せるようになってきていたこともあり、まったく苦ではなかった。むしろ、ベテランの研究者たちがこれほどまでに親切なのかと感激し通しの毎日だった。ゲスト的に日帰りの参加者が現れることもあり、残念ながら名を覚えていないが、イタリアから来た教授は特に印象深かった。情熱的に話す人物で、初めはクールマンも他の面々も声の大きさに辟易した様子だったが、次第に話に引き込まれていき、その人物が去った後には、皆で「驚いた。優秀な人物だ」と褒めていた。

事情は忘れたが、日程の途中でペンションに宿が変わり、筆者はエフスティと同室になった。

エフスティもまた親切で、筆者の素朴な意見にも耳を傾け、門前払いにせず議論に付き合ってくれた。非常に壮健な人で、200mは離れていそうな向かいの小島まで泳いで往復するなどしていた。クールマンは、ビーチのレストランで隣合った観光客に流暢なフランス語で話しかけたりしていた。学生時代、パリに留学していたらしい。

合宿の終盤には、筆者もドイツ語で発表する機会をいただいた。多少日常会話ができるようになったとはいえ、専門的な質疑応答に対応できるほどではなく、終始しどろもどろではあったが、本当に貴重な経験だった。

ところで、この研究合宿のために空港へ向かう車中だったと思うが、クールマンが「解釈学は重要だ」と言い出す一幕があった。当時の筆者にはその言わんとするところが分からなかったが、前節で述べた事情からして、それは彼の本心だったのだろう。

留学から帰国してからは、当然ながら顔を合わす機会はほとんどなくなった。生来の筆不精である筆者は、時候の挨拶も苦手にしており、抜き刷りを送るといった昔ながらの交流もしなかった。実は、筆者は幸運にも2013年に今度はハイデルベルクに留学する機会を得たのだが、その際もアーヘンまで会いに行くということはしなかった。博士論文の準備のため図書館と寮を歩き来する生活に終始しており、忙しかったのは事実であるが、一度も会いに行かないというのはやはり勿体なかったと思う。

ただ、関係が断絶したというわけでもない。その年の夏に、アテネで世界哲学会議（World Congress of Philosophy）が開催されたのである。日本からだの旅費も高額になるが、ありがたいことにドイツからはLCCが就航しており、比較的安価に参加することができた。当時のギリシアは経済危機を引きずっており、観光客で賑わっていながらも、どこことなく暗い雰囲気が街全体に漂っていたが、何と言っても哲学分野で世界最大の学会に参加できるというのは貴重な経験で、とても楽しかった。クールマンはそこで、批判的合理主義に見られるようなラディカルな可謬主義を批判的に分析する発表を行ったが、筆者も久高氏とともに聴講し、少し言葉を交わすことができた。なお、この学会ではハーバーマスやウンベルト・エーコの講演があったり、ジョン・マクダウェルやジェイソン・スタンリー、セイラ・ベンハビブ、スーザン・ハークといった大物哲学者たちもあちこちで登壇したりしていたが、当時の筆者には哲学者についての知識がなく、結局クールマンとハーバーマス以外のほとんどを聞き逃してしまった⁵。ハーバーマスは、同じ哲学者であるはずの聴衆に囲まれて写真を撮られ続け、不快そうにしていた。

二度目の留学から帰国後の冬、今度は大学院生への旅費を支援する制度でクールマンへのインタビューに行かせてもらう機会を得た。アーヘン留学時と変わらず、クールマンは快く質疑応答を行ってくれた。場所は大学内ではなく喫茶店だったのだが、クールマンはコーヒーに角砂糖をいくつも放り込み、うまそうに飲んでいた。健康は大丈夫なのかと思ったが、そんな筆者の心中を察してか、帰り際に、ゴルフが大好きでよく出かけているという話をしてくれた。

筆者が最後にクールマンと直接顔を合わせたのは、2014年のことである。ドイツ北東部のバ

⁵ マクダウェルの発表会場には行ったものの、あまりの混雑ぶりに気分が悪くなり、中座してしまった。

ルト海にほど近い小都市グライフスヴァルトで「実践哲学における超越論的論証」という研究会が開かれ、クールマンも招かれたのである⁶。博士論文の提出を間近に控えた筆者であったが、これだけは聴講したいと考え、相当な無理をして参加した。現地で会ったクールマンには「聴講のためにわざわざ (express) 日本から来たのか」と驚かれたのだが、筆者のドイツ語会話は留学が終わってからは急速に鈍っており、「急行に乗ってきたのか」と聞かれたものと勘違いして、ちぐはぐなやり取りになってしまったことが悔やまれる。直前に妻が急逝したとのことで憔悴しており、気の毒だった。また、この研究会にはエフスティも登壇していたが、あれほど壮健だった彼もくたびた様子であった。そのエフスティも昨年亡くなったそうである⁷。

筆者は、クールマンと特別近い関係にあった、というわけではない。舟場教授や久高氏と比べると、付き合いのあった期間も、密度も段違いである。それでも、クールマンの人柄はとても印象に残るものであった。すなわち、親しみやすく親切で、しかし愚直な研究者であり、哲学談義になると止まらない情熱の人、という印象である。今となつては、ああすれば良かった、こうすれば良かったということばかりが脳裏によぎるが、後悔の念は行動に反映させることでしか意味を持ってない。往時に比べれば話題に上ることの少なくなった超越論的語用論ではあるが、しかし考えるべき論点は今なお多く残っている、と筆者は考えている。クールマンと同じ愚直さで、同じ情熱をもってその仕事を引き継ぐことは筆者には到底出来そうもないが、自らの能力の範囲内で超越論的語用論を、そして解釈学を含めたクールマン哲学を論じ、引用し続けることによって、恩を返していければと考えている。

(よしめみちひと 哲学哲学史・准教授)

文献一覧

Apel, Karl-Otto (1973), *Transformation der Philosophie*, 2. Bde., Frankfurt am Main: Suhrkamp. (磯江景孜他訳『哲学の変換』(抄・編訳)、二玄社、1986年。)

— ([1976] 1998), „Das Problem der philosophischen Letztbegründung im Lichte einer transzendentalen Sprachpragmatik. Versuch einer Metakritik des »kritischen Rationalismus«“, in ders.: *Auseinandersetzungen in Erprobung der transzendentalpragmatischen Ansatzes*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, S. 33-79. (宗像恵・伊藤邦武訳「知識の根本的基礎づけ——超越論的遂行論と批判的合理主義——」、竹市明弘編『哲学の変貌』、岩波書店、2000年、所収、pp. 185-266.)

Brune, Jens Peter/Stern, Robert/Werner, Micha H. (eds.) (2017), *Transcendental Arguments in Moral Theory*, Berlin/Boston: De Gruyter.

Damiani, Alberto Mario (2009), *Handlungswissen. Eine transzendente Erkundung nach der*

⁶ クールマンの原稿を含め、この研究会の内容は Brune/Stern/Werner (2017) に収録されている。

⁷ 余談になるが、この研究会では、筆者が近年参照することの多い『二人称的観念の倫理学』(Darwall 2006) の著者スティーブン・ダーウォールも登壇しており、筆者は現地で久高氏に「ダーウォールは有名人だ」と教えていただいたのだが、そのときは興味を持たず、ホテルに帰って博論の続きを書いていた。ダーウォールに言及するたびに、そのことやクールマンとの最後のやりとり、エフスティの様子などを思い出し、同じことを繰り返しているなど悔いている。

sprachpragmatischen Wende, Freiburg/München: Karl Alber.

Darwall, Stephen (2006), *The Second-Person Standpoint: Morality, Respect, and Accountability*, Cambridge, Massachusetts/London, Harvard University Press. (寺田俊郎監訳、会澤久仁子訳『二人称的観点の倫理学 道徳・尊敬・責任』、法政大学出版局、2017年。)

Grundmann, Thomas (2025), „Zum Tod von Wolfgang Kuhlmann——Selbstbestimmtheit als Ideal“, in: *Frankfurter Rundschau*, 21.08.2025 [online], URL: <https://www.fr.de/kultur/gesellschaft/zum-tod-von-wolfgang-kuhlmann-selbstbestimmtheit-als-ideal-93893996.html> (abgerufen am 30. 9. 2025).

Habermas, Jürgen (1983), *Moralbewußtsein und kommunikatives Handeln*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (三島憲一・中野敏男・木前利秋訳『道徳意識とコミュニケーション行為』、岩波書店。)

Kuhlmann, Wolfgang (1985), *Reflexive Letztbegründung*, Freiburg/München: Karl Alber.

—— (1992), *Sprachphilosophie — Hermeneutik — Ethik. Studien zur Transzendentalpragmatik*, Würzburg: Königshausen und Neumann.

—— (2009), *Unhintergebarkeit. Studien zur Transzendentalpragmatik*, Würzburg: Königshausen & Neumann.

—— (2020), *Fremde Gedanken Fassen. Zu einem Grundzug hermeneutischen Verstehens*, Berlin/Boston: De Gruyter.

—— (2023), *Zur Struktur unserer Vernunft. Studien zur Transzendentalpragmatik*, Würzburg: Königshausen und Neumann.

嘉目道人 (2017), 『超越論的語用論の再検討——現代のフィヒテ主義は可能か——』、大阪大学出版会。